はじめに

本稿は日本教職員連盟の教育文化研究所が編集し、刊行している『教育創造』の創刊号に掲載したものの転載です。

学校の先生方に、今の漢字教育の致命的な欠陥を知って頂き、真の漢字教育を実践して頂くために書いたものですが、学校の先生でなくても、やはり石井方式の原理を知って頂きたいと思い、ここに転載いたしました。

私に与えられた表題は『国語教育における漢字指導の実際』であるが、この一連の言葉の中に、和語は“における”と、“の”の二語しかなく、他の言葉はすべて漢語である。しかも、“における”は、素材としては“に、おけ、る”という三つの和語で成り立っているが、実は漢文の“於”（英語 in, on, at などの前置詞に当たる語）の訓読のために作り出された言葉であって、厳密に言えば純粋の和語とは言えないものである。

それはともあれ、和語のこの二語は、どちらも漢語と漢語との関係を明らかにするための働きをもった言葉（英語が観念語であるのに対して“関係語”と言うことができる）であって、重要な意味、内容をもった言葉は、すべて漢語によって占められている。

国文がすべてこのような構成をしているというわけではないが、今や日本人の書く文章は、「漢語を用いなければ、内容のある“文らしい文”を書き表わすことができない」と言っても決して過言ではない。

そして、その漢語は、漢字を用いて表記しなければ、正確な表現も理解もひどく困難なものになることは、“香水・硬水・鉱水”と“こうすい”という表記とを比べてみれば明瞭であろう。

漢字学習は、言うまでもなく国語学習の一部である。しかし、それは重要な一部であって、どんなに重視しても重視しすぎることはないと言ってよい。この認識の足りなさが、国語教育を不振にしていることを、まず指摘しておきたい。

次に、私の経歴を申し上げる。私は、終戦直後、旧制中学から新制高校への移行期に国語科教師を勤め、新制中学出身者の漢字力の低いのに驚き、中学の国語教育を知る必要を感じて新制中学の教師になった。ここで、小学校を卒業してきたばかりの生徒を担任し、小学校卒業時の漢字力の貧弱なことを知り、今度は、小学校の漢字教育を追求したく思うようになった。

たまたま、昭和二十六年、指導主事になる機会を得たので、時々小学校を訪問してその国語教育の実際を見ることに努めた。その結果、自ら小学校教師となり、実際に国語指導をしてみて、その中から効果ある指導法を発見しよう、と決心するに至った。

昭和二十八年から四十二年までの十四年間、ある時は一年生から二年生まで、ある時は三年生まで、ある時は六年生まで、いろいろな方法を試み、後述する新法を発見した。

四十三年以降の十年間は、幼児の漢字教育に主力を注いでいるが、大学生のための漢字教育講座を持っている。従って、私は、幼児から大学生に至るまで、小・中・高校生のすべてにわたって直接指導をしたという経験を持つ。

従って、私の述べる“漢字指導法”は、幼児から大学生に至るあらゆる段階における指導の体験の中から発見し、かつ実証したものであって、机上で案出された“学者の空論”とは異なるものであることを、初めにお断わりしておく次第である。